

明けましておめでとうございます。  
謹んで新年のお祝いを申し上げます。

冬型気圧配置が続き、日本海側では吹雪や大雪になった地域も多く、大変だったことでしょう。一方太平洋側の地域は、概ね晴れだったようです。横浜市に住んでいる私としては、毎年三が日は晴れの日が多く、日本海側の地域の方々に、いつも申し訳ない思いを持っています。ですが、夏になりますとこちらは余りにも暑く、日本海側の地域が気候的に大変羨ましくなりますので、これでイーブンということにさせていただいています。

さて、年初のご挨拶ですが、例年とは異なり、ちょっとシリアスな話題を取り上げたいと思います。昨年8月に国際的な水銀規制ルールを定めた「水俣条約」が発効されました。所謂チッソという会社（2回程替わってチッソと言う社名になっています）が、メチル水銀を含む廃液を水俣湾に流し、周辺住民、自然環境に甚大な影響を与えた事件がありました。1932年に廃液を流し出し、約20年後の1953年に最初の患者が発症し、1956年に水俣病として公式に確認されました。多数の方々が亡くなり、深刻な神経障害で苦しんでいる方々が出たという大変悲惨な人災故に、昨年70以上の国と地域がこの条約を締結しています。皆さんのなかには、水俣病をご存知ない方もいらっしゃるかもしれませんが、この水俣病事件は様々な社会の課題を提示しているのです。

チッソは水俣病が公認されてからも、メチル水銀を流し続け、1958年には水俣湾がダメならと不知火海へと流路を変更しました（その結果汚染が拡大）。製品であるアセトアルデヒドの生産を中止したのは1968年ですから、36年間も流し続けた可能性もあるほどです。その結果、流されたメチル水銀を呑み込んだ魚を食べた鳥が死に、餌の魚を食べた猫が死に、その後は漁業に携わる住民とその家族（こども、青年、年配者）、さらにお腹にいる赤ちゃん（胎児性水俣病）までもが、自分たちが釣った魚を食べたために亡くなり、また過酷な神経障害で苦しんだのです。チッソの社員は、住民に死者が出ていることを知っていても、その間それでもメチル水銀を流し続けたのです（チッソ社長が住民に謝罪したのが1968年です）。会社を守るため、自分の生活を守るために、それでも社員は流したのです。さらに驚くのは、1959年にチッソは、患者互助会に対し、「死んだものには32万円、大人の患者は10万円（年間）、未成年者の患者は3万円（年間）を補償するが、今後排水が水俣病に関係があったことがわかって一切の追加補償はしない」という人の命や人格を全く無視した契約を取り交わさせたのです。たとえ時代を考慮したとしても、皆さん、こんなことが許されるのでしょうか（本当に恐ろしいことですが、住民の無知につけ込んで、当時はそれが通ったのです）。

これほどの罪悪性はないにしても、最近も工場から出荷する車の保安基準適合検査での不正を指摘された自動車会社や品質データの改ざんを会社ぐるみで承知のうえで行ってい

た非鉄金属メーカーの事例等、性質的には同様な事件が多数発生しています。企業に務めている社員は、いつの時代でも経営サイドの言いなりになるという宿命を持っているのでしょうか。私としては「そうではない」ということを、声を大にして言いたいところです。少なくとも、自分が係る仕事そのものが、社会に悪影響を与えることが分かった時点で、どういう行動を取るかで、人生（人の道）が変わることを肝に銘じる必要があると思います。

次に、国、県及び水俣市の問題があります。チッソの活動は国の強力な援助のもとに行われていました。チッソはそれほど、力のある企業だったのです。そのため、行政側は本腰を入れて、対応することはしませんでした。これほどまでに、対処が遅れたのはまさに行政の怠慢、責任逃れの結果と言っても過言ではないでしょう。水俣の住民としては、この苦しみを一刻も早く解決してほしいと、行政組織に訴え願うのは当然でしょう。しかしながら、住民が「国」へ訴えようと東京に出て来て初めて分かったのは、「国」というものはなかったということなのです。

国とは最高裁の裁判官なのか、それとも行政省の大臣、或は総理大臣なのかと動いてみたが、全く実体がないことに気がついたのです。

「東京にいけば、国の在るち思うとったが、東京にや、国はなかったなあ。あれが国ならば国というもんは、おとろしか。（中略）むごかもんばい。見殺しにするつもりかも知れん。おとろしかところじゃったばい、国ちゆうところは。どこに行けば、俺家<sup>おるげ</sup>の国のあるじゃるか」（『苦海浄土』第二部「神々の村」）

この思いを皆さんどう感じますか。我々国民を守るはずの「国」とは一体どこにあるのかと。

さらに、世間、周りの社会があります。水俣病に罹った人たちは、漁業を糧としていた漁民が多く、貧しい生活をしていたのです。世間の目を気にして、水俣病に罹っていること自体を隠すようになり、またチッソを含め回りが、そういう風に患者たちが水俣病であることを公言できないように仕向けていくのです。生活保護を受けるのは恥だと思ふ庶民の気持ちにつけ込んでくるのです。また、それを暗黙のうちに認めている世間、地域社会というものがあるのです。

人の尊厳を打ち砕き、美しい自然環境を破壊した水俣病事件は未だに終わっていません。未だに補償等で解決に至っていませんし、1990年に水俣湾にたまった水銀で汚染された汚泥を鋼板で囲って埋め立てただけの状態なのです。もし大地震が起こり、鋼板の囲いが崩れたら、また水俣湾は汚染されてしまうのです。

このように、水俣病の事件はいろいろなことを考えさせられるのです。私が、特に影響を受けたのは、『苦海浄土』<sup>くがいじょうど</sup>（石牟礼道子作）という本です。20世紀の日本文学を代表す

る作品のひとつとして、高い評価を得ているこの本は、涙なくして読むことはできないでしょう。人間の業はどこまでも深いのかと思うと同時に、それでも人間はこれほどまでに美しいのかと思えるのです。水俣病に罹った空太郎少年の面倒を見るおじいさんが言うセリフがあります。

「そら海の上はよかもね。海の上におればわがひとりの天下じゃもね。魚釣つとるときゃ、自分が殿さまじゃもね。舟に乗りさえすれば、夢見ておっても魚はかかってくるとでござすばい。ただ冬の寒か間だけはそういうわけにもゆかんとでござすが。魚は舟の上で食うとがいちばん、うもうござす。舟にゃこまんか鍋釜のせて、七輪ものせて、茶わんと皿をいっちょずつ、味噌も醤油ものせてゆく。そして、焼酎びんも忘れずにのせてゆく。昔から、鯛は殿さまの食わす魚ちゅうが、われわれ漁師にゃ、ふだんの食いもんでござす。してみりゃ、われわれの漁師の舌は殿さま舌でござす。(中略) 魚は天のくれらすもんでござす。天のくれらすもんを、ただで、わが要ると思うしことって、その日を暮らす。これより上の栄華がどこにゆけばあろうかい。」(『苦海浄土』第三部「天の魚」)

というような自然豊かな環境のなかで、まるで天国のような穏やかな生活が、近代社会のためとして事業展開していたチツソにより、突然、破壊され、家族一同が地獄のような生活を強いられるようになるのです。家族が殺され、生活がズタズタに引き裂かれて、苦悶に苦悶を重ねた後に、その憎くて、憎くてしかたないチツソを、水俣病に罹った一部の方々は、最終的には心では「許す」のです。

それでは、纏めたいと思います。

まず、自分の会社(或は仕事)が社会に害を与えていることを知ったら、どういう行動を取ることで自分は納得できるのでしょうか。

次に、資本主義のもとでの消費社会では、我々が消費をするということが、グローバルな観点から見ると、どこかで環境を破壊し、誰かの生活を苦しめている可能性があると言えるでしょう。(恐ろしいことですが)消費することで、いつの間にか、チツソと同じようなことをしてしまっている場合があると知ったとき、自分はどうしたらいいのでしょうか。

それから、国や社会とは一体誰なのでしょう。身近に問題が発生したら、誰が守ってくれるのでしょうか。自分が住んでいる地域社会は果たして守ってくれるのでしょうか。

また、幸せな生活とはどういう生活なのでしょう。我々の今の生活は果たして幸せなものだと言えるのでしょうか。

そして、皆さん、もしまだ読んでいないようでしたら、このお正月に『苦海浄土』を読んでみてはいかがでしょうか。常に弱者は虐げられます。虐げられた人々の叫びは、我々の心を揺さぶります。程度の差こそあれ、現在においても様々な地域に課題があります。今年一年、自分の出来る範囲で、少しずつでも「実際に行動する」ということを念頭に置

きたいと思います。

正月早々から、深刻な話題で大変恐縮ですが、今年テーマとして、どうしてもこれを取り上げたかったのです。ご容赦下さい。

それでは、引き続き倍旧のご厚情を賜りたく、お願い申し上げます。  
今年一年の皆様のご多幸を心よりお祈り申し上げます。

平成30年元旦

株式会社サイモンズ  
代表取締役社長  
齊川 満

